

〈報告②〉 欧州における右翼ポピュリズム：
 欧州連合（EU）、エスノ・ナショナリズム、民主政、
 グローバル化に関する言説的レトリック

II. RIGHT WING POPULISM IN EUROPE:
 A DISCOURSIIVE RHETORIC FOCUSED ON EUROPEAN UNION,
 ETHNO-NATIONALISM, DEMOCRACY AND GLOBALIZATION

カルロス・デ・クエト・ノゲラス*

訳 山口 達也**

中谷 義和***

キーワード：右翼政党、ポピュリズム、欧州懐疑主義、
 エスノ・ナショナリズム、民主政、グローバル化

1. 社会諸科学におけるポピュリズムと政治分析

「ポピュリズム」いう言葉は極めて両義的である。これは事実であるにもかかわらず、精確に定義されることなく、社会諸科学においては繁用される傾向を強くしているし、政治分析の特定分野をなしてもいる。ポピュリズムとは特殊な政治的レトリックであって、複雑な諸問題を極度に単純化し、その解決を簡単で造作のないかのごとく装っているが、漠然としたものに過ぎ

* グレナダ大学教授

** 立命館大学大学院国際関係研究科博士後期課程

*** 立命館大学名誉教授

ない。だが、この用語がネガティブな含意にもあるために、極右ポピュリスト政党は中道であると自己規定し、広く保守的・右翼的・人種差別主義的で、外国人嫌悪とも結びついた多くの呼称を否定し、このようなラベルを貼るメディア企業やジャーナリストを法的措置に訴えると、あるいは、告発すると脅していることも散見し得る。

彼らは腐敗した体制的エリートとは対照的に、人民を、とりわけ、恵まれず軽視されてきた階層の人民を理解し、代表する庶民であるとし、彼らの関心を知悉し、これを代弁し得る立場にあるとする。ポピュリズムは、また、自らの政党におけるカリスマ的指導者や民衆の支持に依拠してもいる。ポピュリズムは民主政の基本的要件は尊重するものの、既存のイデオロギーはすべて個別の社会には不十分であるとし、これを拒否し、「我々の新しい道」を見つけ、採用しようと試みているが、統一的・明示的理念を、あるいは、長期的統一性に耐え得るイデオロギーや政策を欠いている。欧州社会が社会経済的・政治的・文化的・言説的に複雑な多次元的危機のなかにあることに鑑みると、この状況から今日のポピュリズムの再現を説明し得る。その人氣は、この30年間に政府に対する公的信頼性が最低に落ち込んだ状況のなかでたかまった。これは2008年に始まった経済不況と財政危機（失業、貧困、不平等）の劇的影響に、また、繰り返し実施された痛みを伴う緊縮計画に、さらには、公務員による腐敗と不祥事のスキャンダルの増加に負っている。興味深いことに、選挙によるポピュリズムの勝利は、既成の政治エリートの汚職のスキャンダルが、また、彼らが欧州社会の課題に対処するための公平な解決策を発見し、対応し得るだけの能力を欠いていることが明らかとなり、公的幻滅が強くなった局面にほぼ照応していることである。別の理由は、中・東欧諸国へのEUの拡大プロセスやルーマニアとブルガリアの移住規制の解除と、また、南欧諸国からの若年雇用者の流入や難民危機とも結びついている。こうした移住の流れは中欧・東欧・南欧移民の影響が安全と給与や雇用と福祉計画に、また、社会的給付と学校や病院などの各分野において緊

縮と国家予算の縮小にさらなる打撃を与え、これが右翼ポピュリスト政党の政治的攻勢を呼ぶことになった。

2. 欧州における右翼ポピュリズムの台頭

近時の選挙結果から、右翼ポピュリスト運動や関連政党の衝撃的で顕著な台頭をはっきりと読み取ることができる。これは多くの欧州連合（EU）加盟国にとどまらず、ノルウェーやスイスのような非加盟国やセルビアのような公式の加盟候補国に、さらには、ウクライナのような潜在的加盟候補圏の近時の選挙結果にうかがい得ることである。興味深いことは、北欧諸国に例示されるようリベラルで安定した民主主義と文化的寛容の、また、社会的包摂の地域であると何十年ものあいだ見なされてきた諸国や世界の各地で、反移民運動と欧州懐疑主義やイスラム恐怖症型行動主義が顕在化していることである。人種差別主義的・外国人嫌悪主義的・エスノーナショナリスティック的なポピュリスト型極右イデオロギーを高める政治的・社会的運動がこの20年間に広く欧州市民を動員し、ローカルとリージョンの、また、欧州議会の選挙で躍進し、公的討論を先導し、アジェンダ設定に影響力を行使しているだけでなく、政治の舞台においても、常に、主役となり、恒常的に活発なプレイヤーとなっている。

こうした政党は巧みな戦略を駆使し、広く民衆の支持を得ることで選挙と政治の基盤を拡大している。今日の欧州の右翼ポピュリズムは、非民主的過去のイメージを、また、人種差別主義やナチズムの負の重圧を断つことで、さらには、ネオ・ファシストの言説を避けることで選挙基盤を広げ、リージョンとナショナルなレベルにおける、また、欧州の政治における信頼し得る政治的勢力として台頭している。社会的ネットワークの拡充のなかで現代のメディア創出型民主政が選挙過程に注目し、報道するだけに、右翼ポピュリズムはキャンペーンのプロセスを創出するために大きな可能性を活用し

たという点で、著しい力を発揮している。また、その政治的コミュニケーションは、極めて複雑な現象を単純化する言説と修辞の戦略に依拠している。この戦略は虚偽の主張に訴え、明白な事実を否定し、断言できないことを公言し、許容範囲を超えることを言い、人種、文化、伝統、国民のアイデンティティについて計算ずくめの両義性を帯びた二重のメッセージを発するものである。

欧州の右翼ポピュリスト党は、移民・グローバル化・欧州統合といった特定の政策基盤が大きく変化するなかで、その対応策を単一争点型方向に設定し、これを実効的言説とアジェンダに据えることで、自らの修辞をナショナルとインターナショナルな政治条件の変化に、また、市民の新しい関心に対処しようとしてきた。こうした政党の別の政治と選挙の戦略は、1990年代と2000年代に大陸規模で多くの社会民主党が採用した「第三の道」のなかで深まった伝統的な左／右の亀裂を横断し、これを乗り越え得る能力を示すことにあった。伝統的左翼と右翼の経済と福祉をめぐる対抗のなかで形成された広範な合意は、多くの有権者が両ブロックにそれほどの違いを認めず、新しい政治の選択肢を必要としているということであって、これが道徳的・文化的争点となり、価値をめぐる政治化と分極化を呼び、右翼ポピュリズムの大成功を呼ぶことになった。

さらには、右翼ポピュリズムが顕著な成果を収め得た別の重要な理由は、より洗練された政治的コミュニケーションとマーケティング技術、国内外のソーシャル・メディアとネットワーク、新しい政治言語、広域化と動員の新しい手法、こうした手段を活用し得たことによるのみならず、集会で観客を扇動し、民衆にアピールし、ポピュリストの口調と修辞に訴えて複雑なことを簡単にし得るカリスマ的リーダーの役割にも負っている。

しかし、右翼ポピュリズムが欧州における新しい現象ではなく、長い歴史を辿っているという事実を看過すべきではない。というのも、第二次世界大戦の終結以来、修正主義イデオロギーが流布し、ネオナチ的、または、極右

的政党や運動がこれを促進してきたからである。だが、今日の、この新しい右翼ポピュリズムは伝統的な極右運動と比べて、いくつかの特殊性を帯びていることも確かである。

欧州における主要な右翼ポピュリスト党として、次を挙げることができる。「連合王国独立党 (the United Kingdom Independence Party, UKIP)」(イギリス)、「スイス人民党 (Swiss People's Party, *Schweizerische Volkspartei*)」(スイス)、「スウェーデン民主党 (Sweden Democrats, *Sverigedemokraterna*)」(スウェーデン)、「コトレバ人民党我らのスロヴァキア (Kotleba People's Party Our Slovakia, *Kotleba Ľudová strana – Naše Slovensko*)」(スロヴァキア)、「新右翼会議 (the Congress of the New Right, *Kongres Nowej Prawicy*)」(ポーランド)、「進歩党 (the Progress Party, *Fremskrittspartiet*)」(ノルウェー)、「祖国と自由のために (For Fatherland and Freedom/LNNK, *Tēvzemei un Brīvībai/LNNK*)」(ラトビア)、「北部同盟 (Northern League, *Lega Nord per l'Indipendenza della Padania*)」(イタリア)、「ヨッピク、よりよいハンガリーのための運動 (JOBBIK, the Movement for a Better Hungary *Jobbik Magyarországért Mozgalom*)」(ハンガリー)、「民衆連合、黄金の夜明け (the Popular Association – Golden Dawn, *LaiikósSýndesmos – ChrysiAvgi*)」(ギリシャ)、「ドイツのための選択肢 (Alternative for Germany, *Alternative für Deutschland*)」(ドイツ)、「国民戦線 (National Front, *Front National*)」(フランス)、「真のフィンランド人 (Finns Party, *Perussuomalaiset*)」(フィンランド)、「デンマーク人民党 (the Danish People's Party, *Dansk Folkeparti*)」(デンマーク)、「フラムス・ベランフ (Flemish Interest, *Vlaams Belang*)」(ベルギー)、「オーストリア自由党 (the Freedom Party of Austria, *Freiheitliche Partei Österreichs*)」(オーストリア)、「自由党 (the Party of Freedom, *Partij voor de Vrijheid*)」(オランダ)、以上である。

3. 右翼ポピュリストの修辞

政治学者と社会学者はポピュリスト政党を右翼ポピュリストとし、その戦略はエスノ・ナショナリズム、欧州懐疑主義、イスラム恐怖症、反エリートのポピュリズムのレトリック、既存の政治機関に対するラディカルな批判、こうした要素の組み合わせに依拠して、これが経済保護主義、法と秩序に関する不寛容なアプローチ、自由移民の反対、ナショナルな文化とアイデンティティや価値観の強い保守と保全と結びついているとする。彼らは左右の政治的スペクトルに関する一般的な分類を拒否し、自らを愛国主義的中道派にすぎないとして見なしている。本稿では、欧州統合のプロセス、民主的システム、欧州社会の多文化性、グローバル化のプロセスとその政治的・社会的運動の超国民化、こうした争点に関する彼らの言説を分析することにする。

3.1. 右翼ポピュリズムと EU

こうした右翼ポピュリスト政党の多くが強調することは欧州懐疑主義であって、EU からの離脱を、あるいは、欧州の統合過程の完全な変更を求め

QA8a.9 いくつかの機関について、どの程度に信頼しているかをお答えください。
また、以下の各機関について、信頼する傾向にあるかどうかをお答えください。
欧州連合（％、EU）

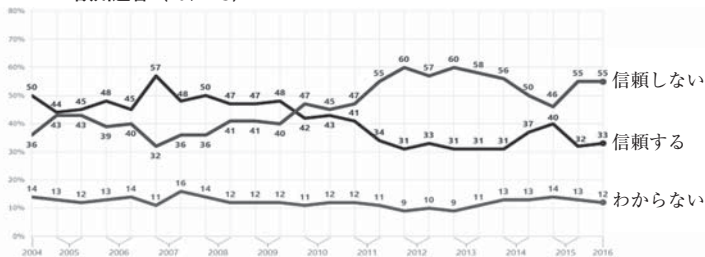


図 1. EU に対する欧州市民の信頼度

出典：Eurobarometer EB85

ている。欧州懐疑主義という言葉の曖昧さを、また、研究者の合意がないことを踏まえて、ここでは、欧州懐疑主義とは、欧州の構築は個別の政府から権限を取り上げ、国民の主権を切り崩すものであるとし、これに反対する運動であると理解する。ユーロバロメーター（Eurobarometer）のデータによると、欧州プロジェクトに寄せる信頼度の低下は多くの EU 加盟国に共通の現象であるだけでなく、EU にマイナスイメージを持つ市民の数も増えている。

3.2 ポピュリズムと民主政

民衆が政治の主流流や伝統的統治党と政治家に、明らかに関心を失っていることに乗じて、また、無数の腐敗事件などの不祥事に起因するダメージを利用することで、極右ポピュリズムは民主主義や国内と欧州の政治について、かなり違った理解を提示するとともに、反体制的立場に訴えている。こうした政党は、ポピュリズムが人民に力を与える高貴なイデオロギーであるとする。ポピュリズムは、人民こそが自治の主体とならなければならないし、議会や政党といった代議制民主政の仲介アクターは真の民主主義の潜在的な障害となっていて、二次的な手段にとどめおくべきであると主張する。また、体制派の腐敗した政治エリートは、個人的ないし党派的自己利益の充足という特別のアジェンダに腐心し、人民の信頼を裏切り、民主的任務を忘れ、市民の関心や要求を無視しているとする。右翼ポピュリズムは市民が決定設定過程に参加する新しい政治システムを求めている。これは、国民投票、市民のイニシアチブ、リコールといったスイス式の直接民主政のプレビシット型手段を多用し得る、新しい民主的秩序を要求するものであって、代議制民主政が社会の諸階層間において、十分に代表されてはいないとする不満と幻滅や失望を生み出したことを背景としている。この事態に鑑みると、右翼のポピュリズムによって新たに表明された政治目標は、集権的全体主義ではなくて小さな政府であり、公共圏と行政における腐敗から解放された小さな機

QA8a いくつかの機関について、どの程度に信頼しているかをお答えください。
また、以下の各機関について、信頼する傾向にあるかどうかをお答えください。
(%、EU、信頼の傾向)



図2. 超国民機関および国民機関に対する市民の信頼度

出典：Eurobarometer EB85 - 2016.

能的国家像であって、直接民主政とより強く結びついている。

すると、右翼ポピュリスト政党は人民との情緒の一体感を作り上げ、自らが庶民や民衆にほかならず、その真の代表者として、その関心と要求を代弁し、擁護すると主張していることになる。この視点から、不当で腐敗したエリートは汚職・大量移民・欧州化・グローバル化に、また、経済と金融危機に対処するために導入された厳しい緊縮措置に責任を負っているとする。例えば、既成の主要な政治的支配層と区別するために、イギリス独立党 (UKIP) は支持者を「人民の軍隊」とするポピュリスト的レトリックに訴えているし、同様に、国民戦線の先の指導者であったジャン＝マリー・ル・ペン (Jean-Marie Le Pen) は「4人のギャング」(共和国連合、フランス民主連合、社会党、共産党)に対抗する民衆の代表者であると自称している。

3.3. ポピュリズムとエスノ・ナショナリズム

既述のように、右翼ポピュリズムは人民の代弁者を自称し、「人民」は現に存在しているとする発想に立っている。その政策やレトリックにおいて、右翼ポピュリズムは民族的・文化的に同質の実体ないし社会について検討し、その存在を唱導するとともに、神話的国民や主権あるコミュニティにつ

いて語り、これが時を越えて存在し、特定の空間や地理と結びついているとする。だが、問題は、彼らの「デモス」の定義であって、その狭い定義からしても、誰が人民に属し、属していないのか、あるいは、誰がこの概念に包摂され、除外されるのかという問題が浮上する。この点で、右翼ポピュリスト政党は人民や社会における階級と世代や言語による、また、イデオロギーとジェンダーによる伝統的違いや亀裂を無視し、これを看過しているだけでなく、これを否定すらする。対照的に、彼らの神話的国民観はネガティブであって、これを外部集団と対置することで自らが代弁する人民とは、他者を排除することで定義されるとする。すると、右翼ポピュリズムの中心には、民族主義的ナショナリズムが底流していることになる。彼らの各国民国家におけるキャンペーンには、明らかに、外国人嫌いや人種差別主義の、あるいは、反ユダヤ主義のプロパガンダが付きまとっていて、これが一般的であることになる。

エスノ・ナショナリスティックなポピュリズムは文化的多様性を拒絶し、下位社会や多様な社会集団を排除ないし差別するアジェンダを共有している。今日、右翼ポピュリストの運動や政党が動員の対象としている敵は、国民国家の砦に侵入した国外の敵であり、民族的・文化的・宗教的に外來の、あるいは、明示的な他者である。だが、「他者」の定義となると、これは、国民のシナリオの説明に従うものであって、かなり可変的である。彼らの排他的・差別的・攻撃的言説の対象はドイツにおけるトルコ人、中・東欧におけるロマ人、イギリス・オーストリア・ハンガリーにおけるユダヤ人である。また、ソ連時代のロシア語圏の産業労働者の広範囲な人口移動による大規模な人口変動のなかで起こったエストニアやラトビアといったバルト諸国でロシア語を話す人々や、ベルギーのフランス語圏の人々である。

右翼ポピュリズムは移民問題を国民的アジェンダや公的議論の対象とし、移民を停止するか、少なくとも、より厳しい移民策や統合策を敷くことで文化的アイデンティティと社会平和を守るべきであると主張している。彼ら

は、ヨーロッパが移民国ではないことは自然なことであるし、社会の民族的^{エスニック}変容を認めるわけにはいかず、多文化主義は「民族の荒廃」を呼ぶとして、これを拒否している。こうしたポピュリストの運動と政党からすると、ウィル・キムリッカが提示しているような複雑化と多元化を強めている社会とは多文化主義とは言えず、自らの国民を脱国民化し、自国民を解体し、国民国家の文化的・政治的価値や欧州のキリスト教文明を危険にさらすものであるとする。彼らは、純粋な国民とは均質な人民のことであると信じているだけに、右翼ポピュリズムは階層間の有意義な相互作用を拒否するとともに、周辺化した諸集団の社会統合に反対し、排外的な本質主義的境界を主張する。この論理に従えば、国民／人民の生存を確保するためには、まず、外国人であることを特定し、排除するとともに、民主政から除外しなければならないことになるし、また、彼らの権利を制限し、本国への帰還を求めざるを得ないことにもなる。民族的アイデンティティが正当な政治的トピックとなり、国民型政治や社会関係の「民族化 (ethnicization)」が求められることになる。

こうしたポピュリスト集団の全てに共通する別の特徴は移民を制限し、多文化主義を拒否することにとどまらず、明確に、ヨーロッパの「イスラム化」と呼び、はばかりことなく反イスラムのレトリックに訴えることである。イスラム原理主義の懸念と反イスラムの姿勢は1980年代後期と1990年代初期に高まっているが、これは、サルマン・ラシュディ (Salman Rushdie) に対する「法学裁定」^{ファトワ}や1989年のフランスにおけるスカーフ問題に触発され、2000年代にはアメリカ (2001年)、スペイン (2004年)、イギリス (2005年) におけるジハード主義的テロリストの攻撃によって激化している。そのキャンペーンはネガティブな固定観念に満ちていて、イスラム教を全体主義的イデオロギーであり、他の世界を支配しようとする暴力的宗教であって、モスク、ミナレット、ブルカ、シャリア評議会からなる秘密の文化的ジハードによって西洋の自由民主政を、また、国民の伝統や習慣と価値を、さらには、主要なキリスト教と世俗主義を攻撃しているだけに、遍在的な脅威であると

する。

こうした欧州のムスリム・コミュニティに対する土着主義的偏見によって、この数年のあいだに、著しい数の急進的右翼ポピュリスト政党はイスラエル国に接近することを試み、そのレトリックから反ユダヤ主義を取り除き、ホロコーストを自覚するとともに、イスラエルが国境を守ることを、とりわけ、イスラムのテロから自衛する権利を認めるべきであるとする。

3.4. ポピュリズムとグローバル化

右翼ポピュリズムが掲げる別の敵は政治エリートであり、また、民族的・文化的・宗教的背景から規定された他の人々でもあるが、これと並んでグローバル化も対象とされる。右翼ポピュリスト政党は自らを普通の庶民の代表者であるとする。彼らは自らへの支持を投票者や市民に訴えるが、それがどのような人々かとなると、近代化の敗者であると思われている人々である。それはグローバル化の脅威や国民主権の喪失の危機を覚えている人々や社会経済の趨勢のなかで自らの社会的地位が危険にさらされていると感じている人々である。そして、欧州社会において、それほど特権的階層に属していない人々である。右翼ポピュリズムは親国家的であって、社会政策と福祉国家の衰退と解体を批判するとともに、政府は経済領域において、より強い役割を果たすべきであるとする。このレトリックは、伝統的に、左翼と結びついていたのであるが、それだけに、下層中間階級や未熟練労働者にとどまらず、恐怖と抗議や怒りを表明しているブルーカラー層においても著しい成果を収めることができたのである。グローバル化と、また、雇用と富に与えた負の影響と、さらには、ポスト工業国における労働者階級の漸次的な社会・経済的周辺化と結びついて、人々と労働の移動が起こったが、これが公式の言説として浮上し、メディアにも取り上げられることで、右翼ポピュリズムが台頭する別の中心的要素となった。

本論が分析対象とする多くの右翼ポピュリスト政党は、左翼の経済政策を

取り込んでいる。例えば、累進課税ないし財政策における富裕税の再編を、また、福祉国家、医療、社会サービス、高齢者ケア、保護主義に対する強い支持などを挙げることができる。これは保守的な社会的・文化的価値観と結びついているし、旺盛なエスノ・ナショナリズムと反移民主義や欧州懐疑主義と一体化している。こうした効果的な政治と選挙の戦略が左翼の有権者のみならず、右翼の「同調派」や自称中道派の支持を集めることになったのである。

3.5. ポピュリズムとトランスナショナル化

欧州における今日の右翼ポピュリズムの別の大きな特徴として、ポピュリズムを欧州全域に及ぶポピュリスト運動や政党へと変えようとしていることを挙げることができる。こうした運動のなかで、国境を越えて個人や集団の、また、政党間の複合的な連携網が作り上げられている。

こうしたトランスナショナルな現象は、新しいマスメディアも利用することで、ラディカルな理念が、あるいは、ある脈絡で奏功したイニシアチブが高い伝播性と確かな影響力を帯び、苦勞することもなく、あっさりと国境を越えることで、多様な社会の視聴者層にアクセスし、新たな支持者を取り込み、一般の注目を集め得ることになったことによる。さらには、共通の旗の下に欧州のポピュリスト右派を統合するために立案された広範な超国家的プロジェクトに、ある種のインスピレーションを吹き込み、その迅速化を期すことも起こった。こうしたイニシアチブが再生産され、他の欧州諸国にドミノ効果を与えた好例として、2009年のスイスにおけるミナレット建設の禁止、2010年上半期にベルギーとフランスの公共空間でブルカを着用することを制限／禁止したことが挙げられる。欧州のポピュリスト観のトランスナショナル化に関する別の例として、2008年初期に「反イスラム化欧州都市構想 (the European project Cities against Islamization)」が打ち上げられたことである。これはモスクやミナレットなどのイスラム的シンボルに反対する

キャンペーンにイデオロギー的基礎を与え、これを正当化することを目的としている。同様に注目すべきことは、2009年10月24日にブダペストにおいて、「欧州民族運動同盟（Alliance of European National Movements）」が設立されたことである¹⁾。

4. 右翼ポピュリストの成果

統一のイデオロギーの枠組みを欠いているとはいえ、右翼ポピュリスト政党は排他的で極端な愛国的・土着主義的イデオロギー、ネオ・ファシスト理念、反移民感情、エスノ・ナショナリスト型心情を独自に組合せ、これを基礎として信条、恐怖、固定観念、気分、プログラムを効果的に設定することで、自由で民主的な選挙において著しい成果を収め、自らの要求を主張するための意思決定機関において多くの議席を占め、その過程に影響を与えている。

視点を選挙に限っても、2014年の6月に行われた近時の欧州議会の選挙で右翼の過激なポピュリスト政党は著しい台頭をみせている。これを欧州の諸選挙の特殊性や、それが二次的位置にしかないということだけで説明し得るわけではない。

表 1. 欧州議会選挙で得た投票 / 議席の割合

国	政党	1989	1994	1999	2004	2009	2014
オーストリア	FPÖ		27,5 / 6	23,4 / 5	6,3 / 1	12,7 / 2	19,7 / 4
ベルギー	VB		7,8 / 2	9,4 / 2	14,3 / 3	9,9 / 2	4,3 / 1
デンマーク	DF			5,8 / 1	6,8 / 1	15,3 / 2	26,6 / 4
フィンランド	SIP					9,8 / 1	12,9 / 2
フランス	FN	11,7 / 10	10,5 / 11	5,7 / 5	9,8 / 7	6,3 / 3	24,9 / 24
ドイツ	AfD						7,1 / 7
ギリシア	LS -CA						9,4 / 3

(次頁に続く)

ハンガリー	JOBBIK					14,8 / 3	14,7 / 3
イタリア	LN	1,8 / 2	6,6 / 6	4,5 / 4	5,0 / 4	10,2 / 9	6,2 / 5
ラトビア	NA/TB/LNNK				29,8 / 4	7,5 / 1	14,3 / 1
オランダ						17,0 / 4	13,3 / 4
ポーランド	UPR/KNP				1,9 / 0	1,1 / 0	7,2 / 4
スロヴァキア	LsNS						1,7 / 0
スウェーデン	SD			0,2 / 0	1,1 / 0	3,3 / 0	9,7 / 2
イギリス	UKIP			6,5 / 3	16,2 / 12	16,5 / 13	27,5 / 24
イギリス	BNP			1,0 / 0	4,9 / 0	6,2 / 2	1,1 / 0

出典: Elaboration of data from ParlGov Database

http://www.parl.gov.org/static/static-2014/stable/documentation/table/view_election.html

2014年の欧州議会選挙では、票の移転で恩恵を受けた政党のイデオロギー的輪郭の特異性が浮上している。2014年の欧州選挙では極右の欧州懐疑派のポピュリスト政党が諸国で主要な勝者となった。なかでもイギリスの「独立党」(UKIP、投票の27.5%、73議席中24議席)、フランスの「国民戦線」(投票の24.86%、フランスの74議席中24議席)、デンマークの「人民党」(投票の26.6%、デンマーク13議席中4議席)が、それぞれ、著しい成果を収め、次いで、ハンガリーの「ヨブビク」(投票の14.7%、ハンガリーの21議席中3議席)、ラトビアの「国民同盟」(投票の29%、ラトビアの9議席中4議席)が成果を残している。

国民レベルで最も著しい選挙実績を収めた例となると、恐らく、2002年のフランス大統領選の場合であって、国民戦線の候補者であるジャン＝マリー・ル・ペンが社会党の候補に勝り、第二ラウンドでジャック・シラクに戦いを挑んでいる。同様の事態は、彼の娘であるマリネ・ル・ベンが第二次ラウンドを戦った2017年の選挙に、また、EU憲法条約をめぐる国民投票において反対派が勝利した2005年にも起こっている。類似の成果はスイスの選挙結果にも表れていて、2015年にスイスの「人民党」は29.4パーセントの票を獲得している。これは1919年以降においてスイスの政党が得た最高

の成果である。また、ノルウェーでは、「進歩党」が2009年の選挙において23%を得て、ノルウェー議会で第二党となっている。これは1997年を端緒とし、2005年にも起こったことである。そして、フィンランドでは、2011年の総選挙で「真のフィンランド人党（Finns Party）」が19.1%の票を獲得し、デンマークの「国民党」は2015年に20.6%の得票率で第二党となっている。さらには、スウェーデンの「民主党」は2014年の選挙で13%を占め、スウェーデンの議会と政党制において第3の地位を占めている。これは2010年の総選挙でスウェーデンの議会（*Riksdag*）における代表権を獲得して以来のことである（20議席、国民投票の5,7%）。そして、オランダでは、2017年のオランダ総選挙で「自由党」が150議席中20議席を獲得し、下院における第二党に躍進している。

確かに、同様に注目されたことに、2017年の総選挙においてオーストリアの「自由党」が26%、2014年の総選挙において「ヨビック」が20%、そして、2017年の総選挙においてアンドレイ・バビシュ率いるチェコの「ANO」が29.9%の票を得ている。また、ギリシャの「黄金の夜明け」は2012年に6,97%を得て、第3のグループとしてギリシャ議会に初めて参加している。

成功という言葉は、現代の欧州において急進的ポピュリスト右翼の台頭を指すために用いられるが、この言葉だけでローカル・リージョナル・ナショナルな規模の欧州の選挙における過激派政党の選挙の成功度を測ることはできない。選挙の成果もさることながら、彼らは得票率に訴えて、より強く政治的・社会文化的な影響力を行使するに及んでいる。例えば、オーストリア、オランダ、フィンランド、ラトビア、デンマーク、スロヴァキア、イタリア、スイス、チェコ共和国といった諸国においては、こうした政党は権力ブローカーとなり、連合政権を支え、これに参加し、なかには、これを主導している場合も起こっている。また、ナショナルとリージョナルの、あるいはローカルの政府に参加し、議会に代表者を送り、常にメディアの話題ともなることで、移民と多文化政策や外交問題と統合戦略などの公的議論に影響

力を行行使し、政策に介入するという点で重要な役割を果たしている。おそらく最も驚くべき事例はスイスの「国民党 (SVP)」の場合であって、この党は1929年以來、スイス連邦政府の一翼を構成している。

表 2. 各国政府への右翼政党の参加

国	政党	1983	1986	2000	2002	2003
オーストリア	FPÖ	1983 Sinowatz	1986 Vranitzky	2000 Schuessel 1	2002 Schuessel 2	2003 Schuessel 3
ベルギー	VG	-	-	-	-	-
デンマーク	DF	-	-	-	-	-
フィンランド	SPIP	1983 Sorsa 6	1987 Holkeri 1			2015 Sipilae 1
フランス	-	-	-	-	-	-
ドイツ	AfD	-	-	-	-	-
ギリシャ	LS-CA	-	-	-	-	-
ハンガリー	JOBBIK	-	-	-	-	-
イタリア	LN	1994 Berlusconi 1	2001 Berlusconi 2	2005 BERLUSCONI 3	2008 BERLUSCONI 4	
ラトビア	NA/TB/ LNNK	1997 KRASTS 1	1998 KRASTS 2	1998 KRISTOPANS 1	1999 KRISTOPANS 2	1999 SKELE 3
	2000 BERZINS	2002 REPSE	2006 KALVITIS 3	2007 GODMANIS 2	2009 DOMBROVSKIS 1	2010 DOMBROVSKIS 2
	2011 DOMBROVSKIS 4	2014 STRAUJUMA 1	2014 StraujumA 2	2016 Kucinskis		
オランダ	PVV				2013 Solberg	
ノルウェー	Fr					
ポーランド	UPR/KNP	-	-	-	-	-
スロヴァキア	LsNS	-	-	-	-	-
スウェーデン	SD	-	-	-	-	-
スイス	SVP	1929年以降の連邦議会において、また2003年以降、指導的与党か？				
イギリス	UKIP	-	-	-	-	-
	BNP	-	-	-	-	-

出典：Elaboration of data from ParlGov Database <http://www.parl.gov.org/>

影響力や成果の別の形態は、いわゆる主流派政党（中道左派と中道右派）のプラグマティックな譲歩を引き出していることである。これは、極右の政府ないし議会のパートナーを引きつけ、これを緩和し、中立化を期すことで、短期的には、政府の安定を期そうとする場合もあれば、有権者と過激政党との提携を阻止するための役割を果たしている政党と張り合うことを目的としている場合もある。この戦略によって、いわゆる主潮流の政治的主体や伝統的政党は、また、メディアのような広い社会諸部門は極右のタブー理念と姿勢を、また、そのプログラムと言説を徐々に取り入れ、これに迎合することになった。こうした譲歩は主流派アクターのアジェンダ設定に徐々に組み込まれることで、基本的には、次の二つの事態が起こった。ひとつは、かなりの事例からも明らかなように、当初はタブー視されていた極端な思想が、今や、より多くの人々にとって正当視され、受け入れられるようになっていくことである。第二に、極端なアジェンダとレトリックが正常化し、陳腐化することで、右翼のポピュリスト政党は欧州における極端な右翼政党であるとするネガティブな烙印を押されることなく、信頼し得る政治勢力として登場し得るようになったことである。この点で、デンマークは興味深い事例にあたる。というのも、2001年から2011年に、デンマークの「人民党」は旧自由党と保守党政権と議会内協力を期すことで、デンマークにおける移民政策の制限と帰化の厳格化を受け入れさせたからである。

成果を測る別の方法として、この数年間の世論の調査と計測の結果を挙げることができる。移民政策と欧州統合やイスラムといった話題が浮上すると、ヨーロッパ市民の態度は、世論に即してみると、右翼ポピュリスト政党の立場と理念のかなりの部分と共鳴し、一致するようになったことである。極右政党の最大の成果はこうした論争的施策や単純な処方箋について、公衆の広い支持を集め、これが驚くほど高い社会的需要となるとともに、その政策は広く公共政策のアジェンダとして正当視されるようになっていく。

5. 結論

こうした政治と選挙の戦略の有効性が、また、その成果が現実となるなかで、政治機関や市民社会においては、極右の、また、人種差別主義的運動と政党の躍進に対応するために、どのような戦略が最善であるかをめぐる激しい議論も浮上している。ヨーロッパでは二度の大戦期に起こった出来事を経験しているだけに、大陸はこうしたイデオロギーについては免疫があるだろうという一般的な意見が間違っているとすれば、実効的な行動が求められることになる。極右のイデオロギーが好評を博し、政治文化として展開することで多くのヨーロッパ諸国で広く受け入れられるようになることは困難であるにせよ、このような脅威から、制度統合と社会的包摂や文化的寛容という点で第二次世界大戦以降の欧州が得た成果を守るためには、一連のメカニズムと方策が設定されてしかるべきである。

第1の提案は、右翼のポピュリスト政党が跋扈し得ない制度上の障害や障壁を設け、議会に代表者を送ることをより困難にすることである。これはエストニアとドイツで採択されていることであって、国民投票の5%という比較的高い閾値が設定されている。あるいは、地域カウンスルにおいて国民戦線の影響力を減らす試みとして、2004年の地方選挙でフランスが導入した第2ラウンド型選挙制度は制度上の障壁という点で効果的である。別の制度的方法は国内法と党規制である。ドイツの憲法裁判所は、文書・スピーチ・シンボルないし構造のいずれであれ、国民社会主義との関係を示す政党または集団を禁止し、違法とする権限を有している²⁾。最近、多くの右翼ポピュリスト政党は戦略的軟化策を導入しているにせよ、ドイツ、イギリス、ギリシャ、ベルギーにおける右翼ポピュリスト政党の多くの指導者やその党員がホロコーストの事実を否認し、外国人恐怖症や人種差別などの罪で告発や有罪判決を繰り返しているという事実を隠すことはできない。

別の事例として、スウェーデン、フランス、ベルギー、オランダ、ドイツ

といった諸国に見られるように、主要政党は右翼ポピュリスト政党の孤立化を期し、この政党との議論を忌避するとともに、選挙ないし行政における提携を避けるという防疫線 (*cordon sanitaire*) を張っている。これは、政府の施策やレベルにおいて、彼らと協働しないことを、また、反移民のレトリックや政治プログラムを受け入れない意志にあることを意味する。だが、スウェーデンの場合のように、他の政党がスウェーデン民主党を排除するための連合を結成した自治体において、その後、スウェーデン民主党が選挙で成功したという事例も残されている。

分析者や研究者のなかには、ポピュリスト政党は対立的立場をとることでのみ存在し得るわけであるから、彼らを取り込み、政府の責任を引き受けさせる機会を与えることを提案する論者もいる。右翼ポピュリスト政党のなかには、政権の座に就いたにせよ、連立のパートナーとして有権者の期待とニーズに応えるだけのプログラムや戦略を、また、技術と専門能力を欠いているだけに、存続し得た政党となると、ほとんどないと言える。少ない例のひとつがオーストリアの国民党 (ÖVP) と自由党 (FPÖ) との連立を、あるいは、2002年の5月にピム・フォルトインが参加したオランダの連立政権を挙げることができるが、その後、野党に戻っている。この経緯からすると、選挙民の支持が急速に高まったことを示している。だが、スイスの場合は事例を異にし、人民党は何十年も連邦参事会に参加し、連邦議会の最大政党の地位にあることに鑑みると、この理論とは矛盾すると考えられる。

このトピックに底流していることは、伝統的な政党と政治が弱体化し、見たところ、社会の大部分との接触を失っていて、ローカルとグローバルなレベルの社会環境の変化に対応し得なくなっていることである。それだけに、また、右翼ポピュリスト運動の肥沃な土壌ともなったのである。ポピュリズムの台頭は、選挙民が既成政党によっては十分に配慮されていないという要求を持っていることを、また、この政党が敏感に選挙民の要求に応え、開かれた存在になるというより、政治的影響力を強めることに腐心してきたこと

を示すものである。ポピュリズムの挑戦は、既成政党がこうした民主政のジレンマに対処することを求めている。最善の長期的戦略は、潜在的な極右の有権者を、つまり、不満を覚え、欲求不満を抱えている怒れる有権者のニーズを満たし、要求に応えることによって、また、彼らの社会経済的利益を明確にし、その生活水準を、とりわけ、社会保障の向上を、さらには、労働市場の安全と安定を期すことで、現代のポピュリズムの前提条件を排除することである。社会の多くの人々がポピュリストの単純化や外国人嫌いのレトリックに、さらには、スケープゴートを生む偏見に魅せられているかぎり、右翼ポピュリズムは民主政治において重要な役割を演じ続けることになる。ポピュリズムに関する課題への決定的応答は人民、市民、有権者に発しなければならない。最も効果的な解決策を期すためには、より多くの民主主義、より多くの対応と実効性が、換言すれば、より良いガバナンスが求められることになる。

注

- 1) 創立メンバーには、フランスの国民戦線、イギリス国民党、イタリアの三色の炎、スウェーデン民主党、ベルギーの国民戦線、ハンガリーのヨッピクなどが含まれていたが、ヨッピクは数年後に脱退している。
- 2) ドイツでは、1952年には社会主義国民党 (Sozialistische Reichspartei, SRP) が、1956年にはドイツ共産党 (Kommunistische Partei Deutschlands, KPD) が非合法化されている。